



●多木浩二と建築

「多木浩二と建築」というタイトルは一見漠然としすぎて、とりとめない印象を与えるかもしれない。だが実際にはこれでも乱暴なほど思い切って領域を切断している。多木浩二（1928-2011）の活動の特質は既存の便宜的なカテゴリーを超越したところにあり、ここで建築というジャンルに区切って取り上げるのは、この雑誌が拠って立つ場所の都合にすぎない。ところが一方で、そういった専門的な領域を超越した空間こそ、本誌が考える「日常」でもあるのである。多木の活動の幅広さは、実はこのひとつの空間にとどまり続けようとする意志の現れと言えるのではないだろうか。だから多木が思考した「建築」も、人間の生に根ざした脱領域的な存在だった。『建築と日常』はそこに敬意と共感を抱く。

多木が建築の領域で重要な仕事をしたことは事実である。しかしその重要性に比べ、現時点でそれらの仕事がアクセスしやすい位置にあるとは言えない。その原因は多木の活動が特定の専門領域の枠に収まらないこととも関係するが、より具体的に言えば、ひとつには書籍というかたちで確固た

る体系が築かれていないためである。建築に関わる多木のテキストは雑誌で発表されることが主であり、そのまま単行本に収録されずに時間の塵に埋もれてしまったものが極めて多い。また収録されたとしても、建築の分野に特化して本全体が編まれることは稀であり、そのことも建築界で広くテキストが定着することを遠ざけた。しかしこれは多木がなかば意図したことでもあるように思える。その背景には、自身の仕事に対するまなごしの厳しさとともに、多木の思想に一貫する確からしさへの疑念があっただろう。あらゆる書物や学界に必然的にそなわる体系的、権威性に疑いの眼を向けることは、多木の活動の内容とも通底する。

もうひとつ多木の仕事にアクセスしづらい理由を挙げるなら、それは多木の建築関連の仕事が偏っていることではないだろうか。多木は職業的な建築学者でも建築評論家でもなかったため、その思考の対象は自らが興味を持てる範囲のものに限られた。と言うよりむしろ、自らの実感に根ざした活動をするためにあえて自分をどこにも所属させなかったと言ったほうが正確かもしれないが、ともかくそのことによって、多木の意志とは正反対に、その仕事が私的で閉鎖的なものと見られるきらいがある。しかし当然ながらこうして得られた孤独は、公共に開かれた個人の自由な活動を保障するものにほかならない。

『多木浩二と建築』は、こういった多木の仕事を現在や未来、あるいは歴史に開くという問題意識を持っている。そのためにまず、その仕事を網羅的にリストアップし、それらを読むいくつかの視点を提供する。そして多木ととりわけ親交が深かった建築家・坂本一成との関係に焦点を絞り、多木の活動のひとつの軌跡を描いてみせる。